

特別指定研究

大谷探検隊将来トカラ語資料をめぐる (2)*

荻原裕敏・慶昭蓉

1. 導入

本稿は、本紀要第50集掲載の拙稿『大谷探検隊将来トカラ語資料をめぐる(1)』(以下では『資料(1)』とする)に続く報告である¹⁾。現時点で筆者が把握している大谷探検隊将来トカラ語資料は²⁾、国内では龍谷大学、西厳寺蔵橋資料及び東京国立博物館に、国外では旅順博物館に保管されている。前掲拙稿出版後、これらの資料に関して、荻原(2012)及び慶(2013)を出版した。前者の論文では、旅順博物館所蔵に帰しているトカラ語資料について概略を紹介すると共に、トカラ語断片と判断される全点のリストを掲げておいた³⁾。後者では、東京国立博物館所蔵クチャ語木簡一点の、オリジナルに基づく転写と中国語訳を与えた上で、木簡の内容について再検討を行った⁴⁾。本稿では、前掲『資料(1)』で扱ったクチャ語寺院文書 MS00541を除く、龍谷大学所蔵資料及び西厳寺蔵橋資料中のトカラ語断片と判断可能な断片及びその可能性のある断片全点を出版する。なお、東京国立博物館所蔵の残りの資料については別稿を準備中であり、筆者が把握している大谷探検隊将来トカラ語資料は、間もなくその全体像を明らかにし得ると考えている。ただし、上記の資料以外にも、現在所蔵先不明の断片として『西域考古図譜』図版(13)として出版された二点のトカラ語断片が知られており、この内、(13)-(1)は唐代のクチャ語による世俗文書であるが、既に Ching (2010: 341-342) で扱った⁵⁾。もう一点のクチャ語・サンスクリットによる bilingual の断片も含めて、これら二点については

*) 本研究は、執筆者の一人である慶昭蓉に授与された2015年度沼田研究奨学金による「Manuscripts found from Kucha in the Otani Collection」の研究成果の一部である。同奨学金の関係者の方々、特に受入アドバイザーとなって頂いた龍谷大学国際学部三谷真澄教授に深く感謝申し上げる。また、本稿投稿に際しては、前回同様、龍谷大学仏教文化研究所、西域文化研究会、大宮図書館にご尽力頂いた。特に記して心よりお礼申し上げます。

- 1) 『資料(1)』に対する修正を加えた英語版として、Ching and Ogihara (2012) を参照。
- 2) 本稿では所謂トカラ語 A 並びにトカラ語 B の総称として「トカラ語」を使用するが、現在までの研究成果から判断し、トカラ語 B について言及する場合はクチャ語という名称を使用する。なお、トカラ語 A と称されてきた言語が、唐代の焉耆で口語としても使用されていたと推定される点については、Ogihara (2014) を参照。
- 3) 荻原(2012) 出版後に得られた知見を加えて、荻原(2013a) を公表した。
- 4) この木簡に関する先行研究としては、Pinault (1998a) 及び Tamai (2004) を参照。
- 5) この文書の年代と内容については、Ching (2011) 及び慶(2012) を参照。

別稿で扱う予定である⁶⁾。

2. 断片紹介

現在各国のコレクションに含まれるトカラ語文献について概説している Malzahn (2007a) は、大谷探検隊将来のトカラ語資料についても紹介しており (op. cit.: 93-94)、そこでは『西域考古図譜』で出版された3点のクチャ語断片に言及している⁷⁾。2011年以来の筆者の調査の結果、より多くのトカラ語断片が存在する事が明らかになった。本節では、筆者が龍谷大学所蔵資料中、トカラ語で書かれた部分を含むと判断した断片及びその可能性を有する断片13点を紹介する。トカラ語断片と確定できたものの内、トカラ語 A であると判断される MS06419を除き、他の断片は全てクチャ語によるものである。なお、従来は知られていなかったが、西蔵寺蔵橋資料にも1点、クチャ語を含む断片を見出す事ができた。以下では、『資料(1)』と同様、ローマ字転写 (Transliteration) と音素転写 (Transcription) を分けて提示するが⁸⁾、提示する順序は現在の所蔵番号に従い、その後西蔵寺蔵橋資料1点を扱う。西蔵寺蔵橋資料を除く、13点の写真は International Dunhuang Project (<http://idp.afc.ryukoku.ac.jp/>) のサイトで公開されているが、オリジナルに基づく調査によって初めて解読できる部分も少なくない。

クチャ語の断片については、文字特徴及び言語特徴から、古代期のクチャ語 (Archaic Tocharian B) に属すると判断される断片は見られず、MS04168a2に在証される *ṣuk* (*ṣukt* 'seven') 及び MS04166b1, 2に見られる *lope* (*laupe* 'salve') などの語形が後期或いは口語のクチャ語の特徴を示しているが、殆どの場合において標準的なクチャ語との相違を見出す事はできない⁹⁾。また、断片の出土地点に関する正確な情報は残されていないが、MS04168は出土地点を推定する事が可能である。ただし、殆どの断片について、破損がひどく、前後の文脈を明らかにし得ないため、満足の行く解釈に到達できなかった点をお断りしておく。

なお、MS06109は対応部分不明の漢文仏典の紙背を利用した断片であり、表の漢文面上端にはウイグル文字と思われる文字が見られる。本断片にはトカラ語と確定できる部分は見られ

6) これらの資料以外にも、関東局 (編)『旅順博物館図録』(1943年、座右宝刊行会) 図版78で出版された資料にクチャ語が書かれた陶片一点が存在する。この陶片についてご教示頂いた橘堂晃一博士に感謝申し上げる。

7) これらは Ot. 12 (= MS00541), Ot. 13-1, Ot. 19-1 という番号で紹介されているが、この内の Ot. 12 を Ot. 13-1 と混同している記述が見られる。

8) 以下の転写では下記の転写方式を採用する。

[] : 破損により読みが不確定な箇所

() : 筆者によって推定された箇所

/// : 写本の破損箇所

< > : 断片の行間に書かれた修正部分

— : 破損により判読不能な *akṣara*

∴ : *akṣara* の欠けている子音若しくは母音

{ } : 断片の破損による欠落

†, ‡ : punctuation

9) 言語特徴からの分類については Peyrot (2008 : 204-206) を、文字特徴に基づく分類については Malzahn (2007b) 及び Tamai (2011) を参照されたい。ただし、この二つの分類が年代的に同じ時代を反映するものであるか否かについては、今後も検討が必要である。この点については、荻原 (2013b) を参照。

断片 2 : MS01824 (言語: クチャ語)

残存部分の片面にのみ文字が書かれており、冒頭に紀年が見られる事から世俗文書の断片と見られるが、内容は不明。

w. 15.0×h. 2.8cm

[ローマ字転写]

(1) /// - [ʃ] p kuln tr [c] † - (·)[w] (·)[s] [r] (·)[ny] (-)

(2) /// (·)e (·)ai {-} (·)ā (·)i {-} [o]⁽¹⁾

[音素転写]

(1) /// (pa)[ʃ] p(i)kuln(e) tr(ic)[c](e) † - (·)[w] (·)[s] [r] (·)[ny] (-)

(2) /// (·)e (·)ai {-} (·)ā (·)i {-} [o]⁽¹⁾

[注釈]

(1): 若しくは(·)[ā]か。

[和訳]

(1) [...] 兎年三月(?)。 [...]

(2) {和訳不能}

断片 3 : MS04166 (表: 漢文; 裏: クチャ語)

漢文による仏教徒の文書(恐らく斎文或いは仏教社邑に関する文書)の反故紙を利用した文書で、内容はクチャ語の医学文献であるが、仏典とは異なり、墨色がかなり薄い草書で書かれているため、解読は困難であり、また一部の語彙を除いて、正確な理解は困難である。なお、本断片には、*lope* (*laupe* 'salve'), *ešānets* (*ek* 'eye' の双数属格形 *ešānēnts*) 及び *sātke* (*sāmtke* 'medicine') と言った、後期或いは口語のクチャ語の特徴を示す語形が見られる。なお、漢文部分の筆者による録文を併せて附しておく。

w. 16.0×h. 5.8cm

[漢文部分]

(前欠)

1] 子年十七

2] 食魚茹齋試是常心 [

(後欠)

[ローマ字転写]

a

1 /// || auše pro[u] \ e[we] lass\ tsi - [ñuñ tsa pa] tsna [ll]e⁽¹⁾ tre ya se ///

2 /// lā[ʃ]lñ[e] <[ʃʃa] > tse sātke || [ku]reʃ[ʃ]a sā [t](·) tsa[pa]nal[l] ly[k]-
aške[ɲ ta] l(·)e [se] ///

3 ||| ·[ā] rr[e] ts[r]e || ppāṣṣa⁽²⁾ tāno tsa[pa]lle šwā[tsa] ś[la]⁽³⁾ stanale me-
[le] pa[ta]šle⁽⁴⁾ || a -|||

4 ||| ·(·)i|||

b

1 |||- yasar l[e]špaṣṣana eṣanets\ lope || eṣanets\ lope ||||

2 ||| [ku] tsa rwa [lyu ma me] le t[rā] - - na⁽⁵⁾ eṣanets\ lope cautām[ṣṣ]i
[ca]mp·|||

3 ||| pokemem l[ṣā]lye || ŋake la[k]le yāmo[ṣepi] e[t]su|||

4 ||| - [r]· ṣ(·)e [e]te⁽⁶⁾ [mi]sa - [ŋk]· - - - [m](·)e - - || (-) ·(·)i [ñ]-
(·)[e] - [le tse]|||

[音素転写]

a

1 |||| auše pro[u] e[we] lass tsi - [ñum tsa pa] tsna [ll]e⁽¹⁾ tre ya se |||

2 ||| lā[ṣ]lñ[e] <[ṣṣa]> tse sātke || [ku]reṣ[ṣ]a sā[t](ke) tsa[pa]nal[l](e) ly[k]-
aške[m]ta l(·)e [se]|||

3 ||| ·[ā] rr[e] ts[r]e || ppāṣṣa⁽²⁾ tāno tsa[pa]lle šwā[tsa] ś[la]⁽³⁾ stanale me-
[le](m) pa[ta]šle⁽⁴⁾ || a -|||

4 ||| ·(·)i|||

b

1 |||- yasar l[e]špaṣṣana eṣanets lope || eṣanets lope ||||

2 ||| [ku] tsa rwa [lyu ma me] le t[rā] - - na⁽⁵⁾ eṣanets lope cautām[ṣṣ]i
[ca]mp·|||

3 ||| pokemem l(am)[ṣā]lye || ŋake la[k]le yāmo[ṣepi] e[t]su(wai)|||

4 ||| - [r]· ṣ(·)e [e]te⁽⁶⁾ [mi]sa - [ŋk]· - - - [m](·)e - - || (-) ·(·)i [ñ]-
(·)[e] - [le tse]|||

[注釈]

(1): [tsa pa] tsna [ll]e では解釈できないが、後続部分に在証される tsāp- 'to mash, crush' の gerundive I である tsapanalle の書き誤りか。

(2): 初出の形容詞、語幹は papo* と推定されるが、語義は不明。追加資料を参照。

(3): šwā[ts](i) ś[l](e) とすべきか。

(4): 或いは pa[na]šle。先行する stanale と共に gerundive I と解釈されるが、語根はこれ
まで知られていないため、ここでは和訳を与える事ができない。

(5): 或いは ta。

(6): 或いは ne。

[和訳]

a

- 1 [...] 古くなった [...] 内皮 [...] 砕かれるべきである(?)。 [...]
- 2 [...] からできた薬。||[...] からできた薬が砕かれるべきである。小さい [...]
- 3 [...]||[...] の粒が砕かれるべきである。食物が共に [...] されるべきである(?)。鼻を(?)
[...] すべきである。||[...]
- 4 {和訳不能}

b

- 1 [...] 血、痰から作られたものが両目に対する軟膏である(?)。|| 両目に対する軟膏 ||[...]
- 2 [...] 両目に対する軟膏、蜂蜜でできた [...]
- 3 [...] から作られるべきである。|| さて今、痛みを与えていたものに対して [...]
- 4 [...] 肉 [...]||[...]

断片 4 : MS04167 (言語: クチャ語)

残存部分の片面にのみ文字が書かれており、2 行目に在証される *enkusa* がクチャ語動詞 *enk-* 'to take, seize' の過去分詞女性形単数である事【及び *sriññäkte* 'Śrī' 以外、解釈できない。

w. 4.6×h. 7.3cm

[ローマ字転写]

- (1) ||| - {-} - ñ[ai e] - |||
- (2) |||[e]nkusa | śr[ī]ññ[ä]kte ke [po]⁽¹⁾ kci ya tā
- (3) ||| 1⁽²⁾

[音素転写]

- (1) ||| - {-} - ñ[ai e] - |||
- (2) |||[e]nkusa | Śr[ī]ññ[ä]kte ke [po]⁽¹⁾ kci ya tā
- (3) ||| 1⁽²⁾

[注釈]

- (1): 或いは [ʃo]。
- (2): 或いは punctuation の †。

断片 5 : MS04168 (言語: クチャ語)

漢語「尺」の借用語である *cak** が確認される事から、布に関する世俗文書であったと考えられる¹¹⁾。本文書に在証される *Śiptāk* は、庫車ドルドルオコル (Duldur-akhur) 出土大谷一五

11) 漢語「尺」からの借用語 *cak** の在証例については、Pinault (1998b: 8-11) を参照。

二七「人名記録断片」に現れる「什徳」の音写であるため¹²⁾、本文書の出土地点は同漢文文書と同じ地点であったと推定される¹³⁾。また、本文書の *şuk*(*şukt* ‘seven’) は、後期或いは口語のクチャ語の特徴を示している。なお、参考として大谷一五二七の筆者による録文を附しておく。

w. 8.9×h. 5.8cm

[ローマ字転写]

(a)

(1) *šip tak\ nem\ - ///*

(2) *š[a]k- šuk\ cakam ke - - ///*

(3) *- ///*

(b)

(1) *- - ///*

(2) *m[ā] ste⁽¹⁾ † wāya p[lā] c[ā]⁽²⁾ ///*

(3) *š[ai] k[i]š\ kārūm ///*

(4) *·(·)[ā] ·(·)[e] ·(·)[e] - ·(·)[m] ///*

[音素転写]

(a)

(1) *Šiptük nem - ///*

(2) *š[a]k- šuk cakam ke - - ///*

(3) *- ///*

(b)

(1) *- - ///*

(2) *m[ā] ste⁽¹⁾ † wāya p[lā] c[ā]⁽²⁾ ///*

(3) *š[ai] k[i]š\ kārūm ///*

(4) *·(·)[ā] ·(·)[e] ·(·)[e] - ·(·)[m] ///*

[注釈]

(1)：或いは *sne*。

(2)：この部分は *p[lā]c [ā]* とすべきか。この切り方が正しいならば、クチャ語名詞の *plāce* ‘word, speech, reply’ の単数斜格形である *plāc* と解釈される。なお、以下の和訳では「訴訟を起こす」と訳したが、これまでクチャ語の *plāce* にこのような解釈を支持する例は知られていない。

[和訳]

12) ここで引用した Early Middle Chinese (EMC) 及び Late Middle Chinese (LMC) については、Pulleyblank (1991) を参照。

13) 本漢文文書については、小田義久等 (1984: 76) を参照。

(a)

- (1) 什徳という名前のものが [...]
- (2) 17尺 [...]
- (3) {和訳不能}

(b)

- (1) {和訳不能}
- (2) [...] 彼は訴訟を起こした(?) [...]
- (3) [...] に対する慈悲(?) [...]
- (4) {和訳不能}

【参考】

大谷一五二七 唐代残名籍

(前欠)

- 1] 羅弥吉善 [
- 2] 張孝順 家人什徳 [
- 3] 敬庭 [

(後欠)

断片 6 : MS04169 (言語 : クチャ語)

残存部分の片面にのみ文字が書かれており、銭 (cāne) に関する世俗文書であると推定されるが、詳細は不明。

w. 18.4 × h. 6.1 cm

[ローマ字転写]

- (1) /// ·[r]· — — (·)ś — (·)[tā] s swa tarma
- (2) /// kṣ· [m]m· pṣamnt· t[e]w[e]⁽¹⁾ ñem [c]atekne⁽²⁾ cānem ska se wlāpā
- (3) /// (·)[e] (·)em {— —} ·em wawāpa

[音素転写]

- (1) /// ·[r]· — — (·)ś — (·)[tā] s(a)swa Tarma
- (2) /// Kṣ(e)[m]m(a)pṣamnt(a)t[e]w[e]⁽¹⁾ ñem [c]atekne⁽²⁾ cānem ska se wlāpā
- (3) /// (·)[e] (·)em {— —} ·em wawāpa

[注釈]

- (1) : 初出の人名。ここではサンスクリット *kṣemabandhadeva- に対応すると考え、上記のように推定したが、確定的ではない。
- (2) : 初出の名詞の単数処格であるが、意味は不明。語頭が c- ではなく v- ならば、借用語と推定される。

[和訳]

- (1) [...] 尊敬すべき方よ。 *Tarma*-? [...]
- (2) [...] *Kṣemmapḍmṇtatewe* という名前の者が *catek** に金銭を [...]
- (3) [...] 織られた [...]

断片 7 : MS04170 (言語 : クチャ語 ?)

残存部分の片面にのみ文字が書かれている。2 行目に現れる *tāy* が代名詞の女性形単数属格と解釈できる以外、その他の部分については解釈できない。

w. 7.5×h. 7.0cm

[ローマ字転写]

1 ///[ri] ka rā da te⁽¹⁾ - - ///

2 ///- tāy\ ·e⁽²⁾ -⁽³⁾ ly·e⁽⁴⁾ ///

[音素転写]

1 ///[ri] ka rā da te⁽¹⁾ - - ///

2 ///- tāy ·e⁽²⁾ -⁽³⁾ ly·e⁽⁴⁾ ///

[注釈]

- (1) : 或いは *ne*。
- (2) : [w]e か。
- (3) : [ñ] か。
- (4) : ly[k]e か。

断片 8 : MS04667 (表 : 漢文・サンスクリット ; 裏 : クチャ語)

対応部分不明の漢文仏典の紙背を利用した断片。表の漢文面の行間にはサンスクリットが書かれている。漢文面の比定に至っていないため、サンスクリットとの対応について確かな事は言えないが、関連性を有する可能性も排除できない¹⁴⁾。裏面 1 行目には *Swātsi* 'food' が、また 3 行目の *tkā[ṣ]ṣi* は動詞の imperfect 或いは optative と推定される事からクチャ語と判断されるが、破損が著しく、連続した文脈を回収できない。

w. 5.4×h. 4.4cm

[漢文部分]

(前欠)

1] 毘之罪 [

14) 『慈悲道場懺法』(T. 45, no. 1909, 950c1-4; 956c10-17) 及び『轉經行道願往生淨土法事讚』(T. 47, no. 1979, 435a4-11) に類似の内容が見られる。サンスクリット部分の 2 行目は、『慈悲道場懺法』(T. 45, no. 1909, 956c11-14) 中に対応箇所を有するかも知れない。追加資料を参照。

1' /// *r[tha]t[vai]na † bhagavacchā* ///

2] 自然逍遙 [

2' /// *(pa)riṣakvasantati [tām]* ///

3] 圖依□ [

(後欠)

[ローマ字転写]

1 /// - (·)[s]· (·)*n*· *n* *swā[ts]*· ///

2 /// *a [s]·m*· (·)[*e k*]· *k[au m]au [s]*· ///

3 /// - - - *tkā[ṣ]ṣi kr[ai ta r]e [ti m](·) r(·)o* - ///

4 /// (·)[*ā*] - (·)*ā kai* - [*ra m*] *pa [ñ]i* ///

5 /// - [*nts]*· *ko* - (·)[*i*] ///

[音素転写]

1 /// - (·)[s]· (·)*n*· *n swā[ts](i)* ///

2 /// *a [s]·m*· (·)[*e k*]· *k[au m]au [s]*· ///

3 /// - - - *tkā[ṣ]ṣi kr[ai ta r]e [ti m](·) r(·)o* - ///

4 /// (·)[*ā*] - (·)*ā kai* - [*ra m*] *pa [ñ]i* ///

5 /// - [*nts]*· *ko* - (·)[*i*] ///

断片 9 : MS06131 (言語: クチャ語)

残存部分の片面にのみ文字が書かれている。残存部分に見られる *ciṣṣe* は、クチャ語の形容詞 *ciṣṣe* 'thy' と解釈できる。

w. 5.0×h. 7.0cm

[ローマ字転写]

(1) /// - { - - } - ///

(2) /// - *ciṣṣe a* - ///

[音素転写]

(1) /// - { - - } - ///

(2) /// - *ciṣṣe a* - ///

断片10: MS06271 (言語: クチャ語)

表面 2 行目が、*(on)[o]lme [p]e[lai](kne)* 「衆生が法を(?)」と解釈できる事から、仏典であると見られる。また、裏面 2 行目の *mar* は一人称現在形・接統法単数中動態の動詞語尾と推定される。

w. 2.8×h. 2.0cm

[ローマ字転写]

(a)

(1) /// - ///

(2) /// (·) [o] lme [p] e [lai] ///

(3) /// [k] (·) - - ///

(b)

(1) /// - ///

(2) /// [m] (·) r\ ·o -^a(\) ///

(3) /// - [r] (·) - ///

[音素転写]

(a)

(1) /// - ///

(2) /// (on) [o] lme⁽¹⁾ [p] e [lai] (kne) ///

(3) /// [k] (·) - - ///

(b)

(1) /// - ///

(2) /// [m] (a) r ·o - ///

(3) /// - [r] (·) - ///

[注釈]

(1) : 或いは (wn) [o] lme。

断片11: MS06419 (表: 漢文; 裏: トカラ語 A)

漢訳『妙法蓮華經』(対応部分は T. 09, no. 262, 49a16-19) の紙背を利用した断片。残存部分からトカラ語 A と推測される。トカラ語 A 断片は基本的に Shorchuk 或いは Turfan で発見されるため、本断片もどちらかの地域で発見されたものと考えられる。なお、ここに在証される *pākr* はトカラ語 A の *pākūr* 'obvious' を表していると考えられるが、このような表記は管見の限り初出であり、書写した者の特殊な言語背景を示すものかも知れない。

w. 6.5 × h. 3.6cm

[漢文部分]

(前欠)

1] □ 聞香知貴_國 [

2] 方殊沙 波利_國 [

(後欠)

[ローマ字転写]

(1) /// - { - } - - - - ///

(2) /// - [k] (·) one pāk_{ij} r_āk\ t_a ///

[音素転写]

(1) /// - { - } - - - - ///

(2) /// - [k] (·) one pākr tāk tū ///

[和訳]

1 {和訳不能}

2 [...] が現れた。 [...]

断片12：MS11055（表：漢文；裏：クチャ語・サンスクリット）

漢訳『道行般若経』（対応部分は T. 08, no. 224, 440a07-09）を含む仏典の紙背を利用した断片であるが、書体から六朝時代のものと推定される。残存部分 2 行目の *kewiye* 'pertaining to a cow' がクチャ語であると判断される以外はサンスクリットであるが、内容は不明。なお、クチャ語部分は、後続するサンスクリット部分よりも大きな文字で書かれており、異なる手によって書かれたと考えられる。

w. 7.9×h. 6.2cm

[漢文部分]

（前欠）

- 1] 淨誠身□ [
- 2] 及諸聲 [
- 3] 之合_合 [
- 4] ^{緣覺五}_{合尔所} □ [
- 5] □ [

（後欠）

[ローマ字転写]

- 1 |||— ·[s]· |||
- 2 |||[l](·)· kewiye o — |||
- 3 ||| kuṣe kuṣe pāku[ṣe ku]|||
- 4 |||— b[ra]jva [m]aitrīm na [m]· |||
- 5 |||— n[i] mi sa ni [s]i |||
- 6 |||— [j]āya [tatra] ·o |||
- 7 |||— ·[m]· — — (—) |||
- 8 |||lī mā lī — |||

[音素転写]

- 1 |||— ·[s]· |||
- 2 |||[l](·)· kewiye o — |||
- 3 ||| kuṣe kuṣe pāku[ṣe ku]|||
- 4 |||— b[ra]jva [m]aitrīm na [m]· |||
- 5 |||— n[i] mi sa ni [s]i |||
- 6 |||— [j]āya [tatra] ·o |||
- 7 |||— ·[m]· — — (—) |||

8 ///lī mā lī — ///

断片13: MS11069 (言語: トカラ語?)

トカラ語であると確定可能な部分はないが、残存部分 1 行目に Fremdzeichen が確認されるため、暫定的にトカラ語と見做した¹⁵⁾。

2-2. 西蔵寺蔵橋資料断片

断片14: 西蔵寺蔵橋資料 ST187 (言語: クチャ語・サンスクリット)¹⁶⁾

大谷探検隊隊員・橘瑞超氏から送付され、小川貫弉龍谷大学名誉教授の下に保管されていた西蔵寺蔵橋資料と称される資料の存在が近年明らかになり、これらの資料の画像は猪飼・大木・橘堂(2008)で閲覧が可能である。これら断片の画像を確認したところ、ブラーフミー文字で書かれた断片1点にクチャ語が含まれている事を確定する事ができた。従来、この資料にはトカラ語断片の存在は知られていなかったため、本稿が対象とする龍谷大学所蔵資料ではないが、ここで紹介しておきたい。この断片は、残存部分から、サンスクリットとクチャ語の bilingual の断片と考えられる¹⁷⁾。表面 2 行目の *winā* は動詞 *winā-sk-* ‘to honor, worship’ に属する語形と推定され、裏面 1 行目には *speltke* ‘zeal, effort’ が在証されるのみであり、内容を比定する事はできない。

w. 2.4×h. 2.5cm

[ローマ字転写]

(a)

(1) /// ·[p]· d· [t]m· ///

(2) /// (·)[m]· ‡ win[ā] ///

(b)

1 /// [n]e spe[ltk]e ///

2 /// [lñ]e † [ā] ///

[音素転写]

(a)

(1) /// ·[p]· d· [t]m· ///

(2) /// (·)[m]· ‡ win[ā] ///

(b)

1 /// [n]e spe[ltk]e ///

2 /// [lñ]e † [ā] ///

15) 本断片 (w. 3.6×h. 5.6cm) のローマ字転写は下記の通りである。

(a)

(1) /// ɽ (ʌ) (·)m· (·)m· [r]tā ///

(2) /// [r]ma la te ||

2 行目の *te* は *ne* と読むべきかも知れない。

16) 本断片の画像は猪飼・大木・橘堂(2008)によった。なお、西蔵寺蔵橋資料については、橘(2009)及び大木・橘堂・吉田(2008)を参照。

17) 本断片にサンスクリットが含まれている確実な根拠はないが、ここでは (a) 面に *da* が見られる事から bilingual と判断した。

結論

本稿では、龍谷大学所蔵資料に含まれる断片13点及び西蔵寺蔵橋資料中の1点、合計14点の断片を扱った。殆どの断片は破損が著しく、仏典・世俗文書共にまとまった文脈を推定する事ができないが、重要な情報を含む断片が確認された。以下、特に興味深いものについて言及する。

まず、トカラ語 A と見られる MS06419は、大谷探検隊将来トカラ語資料に確認された二点目のトカラ語 A 断片であるが¹⁸⁾、漢文文書の紙背を利用している。管見の限りでは、これまでこのようなトカラ語 A 断片は知られておらず、トカラ語 A を使用していた仏教徒と漢文仏典との関係について、今後注意しておく必要がある。

また、MS04166は漢文文書の反故紙を利用したクチャ語の医学文献であるが、これまでに確認されているトカラ語の医学文献には漢文文書の反故紙を利用したものは見られない。特に、本断片は草書体のブラーフミー文字によって書かれており、クチャ語の口語を反映しているだけでなく、表の漢文面は仏教徒の文書であったと推定され、両者の関係を示唆するものとして貴重である。

漢文仏教文献（懺文かも知れない）の行間にサンスクリットが書かれた MS04667は、漢文面の比定が困難なため正確な判断を下す事ができないが、両者が対応していた可能性もあり、仮に対応するならば、二言語を併記する必要が存在していた環境が想定され、このような懺文を作成し、利用していた仏教集団の背景が今後解明される必要がある¹⁹⁾。

MS11055の漢文面は字体から六朝時代のもものと推定されるが、漢文仏典の紙背を利用して書かれたトカラ語仏典中、キジルで発見されたとされるベルリン・コレクション所蔵クチャ語断片 THT553が同じく六朝時代の字体で書かれている。残念ながら、異なる仏典に比定されるが、MS11055と合わせて、このような六朝時代に遡る断片の年代と出土地点に関する研究については別稿に譲りたい。

MS04168には庫車ドルドルオコル (Duldur-akhur) 出土唐代文書大谷一五二七に見られる什徳という名前の音写が確認され、同文書の出土地点として Duldur-akhur の推定を可能にするだけでなく、年代も同時代のものであった事を窺う事ができる。

さらに、上記のような歴史学的な情報以外にも、本稿で扱った断片には初出の語が少なからず確認された。現時点では満足の行く解釈を与える事はできないが、これらの新しい語形はトカラ語の言語学的研究に貢献する。

18) 一点目は旅順博物館所蔵の LM20 1559 4である。本断片は現在未出版であるが、荻原 (2012: 118) のリストで指摘しておいた。

19) さらに、このような文献がクチャ語文献のために再利用された事実も合わせて考察されるべきである。

本稿で扱った断片は『西域考古図譜』には含まれていないものであり、トカラ語と判断可能な断片は12点に上る。これらは Malzahn (2007a) には指摘されておらず、全く新しい発見である。今後は、他国のコレクションに含まれるトカラ語資料全体の中に大谷探検隊将来トカラ語資料を位置づけつつ、西域北道における仏教の実態や歴史的事実に関する解釈がなされる必要がある。

参考文献

- Ching Chao-jung (2010) *Secular documents in Tocharian: Buddhist economy and society in the Kucha region*. (Unpublished dissertation thesis, École Pratique des Hautes Études).
- Ching Chao-jung (2011) Silk in Ancient Kucha: On the Toch. B word *kaum** found in the documents of the Tang period. *Tocharian and Indo-European Studies* 12: 63-82.
- 慶昭蓉 (2012) 「唐代安西之帛線——從吐火羅 B 語世俗文書上的不明語詞 *kaum** 談起」『敦煌研究』2012年第4期: 102-109.
- 慶昭蓉 (2013) 「大谷收藏品中一件龜茲語木簡之再析」中国人民大学国学院(編)『国学的伝承与创新——馮其庸先生從事教学与科研六十周年慶賀學術文集』上海: 上海古籍出版社, 1140-1159.
- Ching Chao-jung and Ogiwara Hiroto (2012) On a Tocharian B monastic account kept in the Otani Collection. *Tocharian and Indo-European Studies* 13: 77-115.
- 猪飼祥夫・大木彰・橘堂晃一 (2008) 猪飼祥夫・大木彰・橘堂晃一(編)『西蔵寺蔵橘資料: 古写経断簡集成: 小川貫式先生著作集』小川貫式先生蔵貴重書研究会.
- 香川默識 (1915) 『西域考古図譜』東京: 國華社.
- Malzahn, Melanie (2007a) Tocharian texts and where to find them. In: Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta tocharica*. Heidelberg: Winter, 79-112.
- Malzahn, Melanie (2007b) The most archaic manuscripts of Tocharian B and the varieties of the Tocharian B language. In: Melanie Malzahn (ed.), *Instrumenta tocharica*. Heidelberg: Winter, 255-297.
- 大木彰・橘堂晃一・吉田豊 (2008) 「大谷探検隊収集「西蔵寺蔵橘資料」について」『東洋史苑』70/71: 59-79.
- 荻原裕敏 (2012) 「多様な中央アジア仏教におけるトカラ仏教の位置づけ～旅順博物館所蔵資料を中心として～」旅順博物館・龍谷大学共編『「中央アジア出土の仏教写本」国際學術会議』京都: 97-120.
- 荻原裕敏 (2013a) 「多様な中央アジア仏教におけるトカラ仏教の位置づけ」龍谷大学アジア仏教文化研究センター2011年度公募研究・研究論文 (<http://barc.ryukoku.ac.jp/koubo/>).
- 荻原裕敏 (2013b) 「略論龜茲石窟現存古代期龜茲語題記」『敦煌吐魯番研究』第十三卷: 371-386.
- Ogiwara Hiroto (2014) Fragments of secular documents in Tocharian A. *Tocharian and Indo-European Studies* 15: 103-129.
- 荻原裕敏・慶昭蓉 (2011) 「大谷探検隊将来トカラ語資料をめぐる(1)」『龍谷大学佛教文化研究所紀要』50: 25-49.
- 小田義久等 (1984) 小田義久等(編)『大谷文書集成 壹』京都: 法蔵館.
- Peyrot, Michaël (2008) *Variation and change in Tocharian B*. Amsterdam: Rodopi.
- Pinault, Georges-Jean (1998a) Tocharian languages and pre-Buddhist culture. In Victor H. Mair (ed.) *The Bronze Age and Early Iron Age peoples of Eastern Central Asia*. Washington D.C.: Institute for the Study of Man, 358-71.
- Pinault, Georges-Jean (1998b) Economic and administrative documents in Tocharian B from the

大谷探検隊将来トカラ語資料をめぐって (2)

- Berezovsky and Petrovsky collections. *Manuscripta Orientalia* 4(4) : 3-20.
- Pulleyblank, E. G. (1991) *Lexicon of reconstructed pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin*. Vancouver: UBC Press.
- 橘真敬 (2009) 「大谷探検隊将来「西蔵寺蔵橘資料」について」『西北出土文献研究』第7号 : 103-112.
- Tamai Tatsushi (2004) On Tocharian Document No. 174 in the Tokyo National Museum. 『内陸アジア言語の研究』第 XIX 号 : 95-107.
- Tamai Tatsushi (2011) *Paläographische Untersuchungen zum B-Tocharischen*. Innsbruck: Institut für Sprachen und Literaturen der Universität Innsbruck.